

援助行動における情報処理過程

村瀬 俊 樹*

Information Processing in Helping Behavior

Toshiki MURASE

私たちは、人を助け人に助けられて生きている。自分の力では解決できないことを他者に手伝ってもらったり、他者を手伝ったりする。他者から教えてもらったり、他者に教えることもある。誰かに元気づけてもらったり、誰かを元気づけたりもする。このように、物質的な面でも、労力的な面でも、情動的な面でも、心理的な面でも人を助けたり人に助けられたりしている。しかしながら、様々な場面で、他者を助ける行動をとりがちな人もいれば、それほどでもない人もいる。そのような違いはどのようにして生じるのだろうか。本論文は、筆者の研究室で、筆者の指導の下に行われた2つの研究を紹介し、1) 人を助ける行動が生起することが期待される場面において、人はどのような情報処理を行うのか、2) そのような情報処理過程の個人差を生み出す要因として共感性や親の養育態度の認知などがどのように関連しているのか、3) どのような情報処理が人を助ける行動の遂行を促進したり抑制したりするのかということについて論じる。

ここで、人を助ける行動についての用語を整理しておく。援助行動 (helping behavior) とは、他者が自分の力では克服できそうもない困難な状態に陥ったり、そのままほおって

おけばそのような状態に陥ってしまいそうな場合に、その人がそのような状態になるのをさげたり、そこから抜け出したりすることができるように力を貸す行為と定義される (中村, 1987)。同様の行動を指すことばに向社会的行動 (prosocial behavior) がある。向社会的行動とは、他人あるいは他の人々の集団を助けようとしたり、こうした人々のためになることをしようとする自発的な行為と定義されている (Eisenberg & Mussen, 1989)。向社会的行動は、社会のためになる行動、社会的価値を含んだ行動という意味合いで使われており、援助行動よりも広く共有や共同なども含むと考えられているが (中村, 1987)、本論では援助行動と向社会的行動を区別せず、どちらも、他者を助ける行動を指すこととする。なお、援助行動や向社会的行動という場合は、その動機が利他的なものであれ、何らかの報酬を目的とするような利己的なものであれ、どちらの場合も含まれるが、特に利他的になされる援助行動・向社会的行動は、愛他的行動 (altruistic behavior) と呼ばれる。本論文では、行動がどのような動機によってなされているかは問わないという立場から、援助行動・向社会的行動という語で表されている他者を助ける行動を問題とし、以下、援

* 島根大学法文学部社会文化学科

助行動という語を用いることとする。

援助行動がどのような要因と関連してなされたりなされなかつたりするのかということに関して、これまで様々な要因が検討されている。Eisenberg & Mussen (1989) は、認知的能力の1つとしての視点取得能力が援助行動の遂行と関連していると述べている。ここでの視点取得能力とは、他者の感情・思考・意図などを推論し理解する能力のことである。また、情動的要因の1つとしての情動共有も援助行動の遂行と関連していると述べている。ここでの情動共有とは、他者が示している情動の状態から生じ、それに伴って自分の側に起こる代理的な情動のあり方と考えられている。また、親の養育態度と子どもの援助行動との関係についても言及しており、温かく、応答的・支持的で、子どもの独立心やものの見方などを尊重し、子どもとよくコミュニケーションをとり、その上で子どもの行動を導き、統制する権威的な (authoritative) 親の子どもが援助行動をとりやすいとしている。

このように、視点取得、情動共有、親の養育態度などが援助行動と関連性があることは示されてきているが、これまでは、おもに援助行動の遂行に着目しており、援助場面において、人がどのような情報処理を行い、それがどのように援助行動につながるのかということをも十分に明らかにしているわけではない。

本論文では、援助場面における情報処理過程について検討した2つの論文を紹介し、視点取得、情動共有、親の養育態度などが援助場面における情報処理過程にどのように関連し、それが援助行動にどのように関連しているのかを検討することとする。

下尾の研究

下尾 (2017) は、援助場面において人がどのような情報を考慮するのかということについて、共感性との関連を検討した。これまでの研究で、共感性と援助行動との関係は検討されているが、援助場面において人がどのような情報に注意を向け、それをどのように処理して援助行動をするか否かの意思決定をしているのかは十分に明らかにされていない。下尾 (2017) は、松井 (1990) を参考に、援助場面において人がどのような情報を考慮しているのか、そしてそれはその人の特性としての共感性とどのように関連し、さらに、援助行動の遂行とどのように関連しているのかを明らかにした。

ここでの共感性とは、他者の感情の理解を含めて、他者の感情を共有すること (澤田, 1998) と定義されているが、認知的側面、情動的側面を含み、反応として自己指向的なものと他者指向的なものを含んだ概念として考えられている。先述の視点取得は認知的で他者指向的なものであり、情動共有は情動的で他者指向的なものである。その他に、認知的自己指向的なものとして想像性、情動的他者指向的なものとして個人的苦痛なども含んで共感性として考え、共感性のこれらの側面が援助場面における情報の考慮とどのように関連しているのかを検討した。

松井 (1990) では、「自分は急いでいるか」・「自分に援助するだけの能力があるか」といった自分 (援助者) に関すること、「被援助者の外見」・「被援助者は助けを求めているか」・「被援助者との付き合い」といった相手 (被援助者) に関すること、「周りに人はいるか」・「周りの人の対応」といった周囲の人に関すること、「援助する際どの程度の時間、労力

を使うか」といった援助コストに関することを、援助場面で検索される情報として設定していた。一方、これまでの援助行動に関する研究では、罪悪感や原因帰属といった人の内面的な要因が援助行動とどのように関係しているのかということも検討されている。そのため、下尾（2017）は、松井（1990）で扱われていた自分に関すること、相手に関すること、周囲の人に関すること、援助コストに関することに加えて、罪悪感や満足感など内面に関することも考慮する情報として取り上げた。

方法

研究協力者

研究協力者は、島根大学における心理学に関する共通教養の授業に出席している1年生から4年生の学生137名（男63名、女74名、1年生94名、2年生19名、3年生22名、4年生2名）であった。

材料

援助場面．6つの援助場面を設定し、その場面における情報の考慮を調べた。6つの援助場面は、松井（1990）による援助場面の分類で分類された「緊急事態の援助」、「寄付・募金的援助」、「日常的援助」のうち、最も日常的に遭遇する可能性の高い「日常的援助」に含まれた6場面を一部改変して使用した。6つの場面は、引越し荷物運びの人手（隣の家が引っ越してきて荷物を運んでいるが人手が足りないようである）、携帯電話置き忘れ（授業終了後、隣の席の人が携帯電話を置き忘れたまま帰ろうとしている）、切符の買い方（駅の券売機でお年寄りが切符の買い方がわからず戸惑っている）、カメラシャッター（観光地でカメラのシャッターを押してほしいと頼まれる）、両替（バスから降りよ

うとしたとき、前の人が1000円札しかなく、両替できず困っている）、書類落下（道で前を歩いている人が書類を落としてしまう）であった。被援助者の性別の記述はせず、また、被援助者は知り合いではない旨を記述した。

援助場面での質問項目．まず、各場面において、被援助者に対して援助を行うかどうかを尋ねた（援助行動質問）。続いて、援助場面において、どのような情報を考慮するかについて、1）自分に関すること（自分は急いでいるか）、2）被援助者に関すること（被援助者の外見、被援助者はどの程度困っているか、被援助者は自分で解決できそうか、被援助者は助けを求めているか）、3）周囲の人に関すること（周囲に人はいるか、周囲の人の対応）、4）援助コストに関すること（援助するとしたらどの程度時間がかかりそうか）、5）内面に関すること（援助するとしたら自分はどの程度満足感が得られそうか、援助しないと自分は何の程度罪悪感を感じそうか、援助するとしたら相手はどう感じるか）の11種類の情報について尋ねた。なお、携帯電話置き忘れ場面に関しては、被援助者は携帯電話を置いたままであることに気付いていないため、「被援助者はどの程度困っているか」、「被援助者は助けを求めているか」に関しては質問項目から除き9種類の情報について尋ね、カメラシャッター場面ではすでに被援助者から援助を要請されているため、「被援助者は助けを求めているか」に関しては質問項目から除き、10種類の情報について尋ねた。

共感性．共感性を測定するにあたって、鈴木・木野（2008）の多次元共感性尺度と野村・赤井・森川（2015）の日本語版IRI（対人反応性指標）の一部を参考にした。鈴木・木野（2008）は、多次元共感性尺度の作成にお

いて、共感性を認知的側面と情動的側面の両方からとらえているが、情動的側面については、並行的所産と応答的所産を取り上げている。並行的所産とは他者の感情をそのまま再生するものであるが、応答的所産とは他者の感情と必ずしも同じではない広い意味での対応した感情経験としている。そして、認知的側面と情動的側面応答的所産については他者指向的なものと自己指向的なものを想定し、視点取得（認知的側面・他者指向的）、想像性（認知的側面・自己指向的）、被影響性（情動的側面並行的所産）、他者指向的反応（情動的側面応答的所産・他者指向的）、自己指向的反応（情動的側面応答的所産・自己指向的）の5つの下位概念を想定している。自己指向的反応は「他人の失敗する姿を見ると自分はそうなりたくないと思う」などの項目からなっているが、下尾（2017）では、共感性を「他者の感情の理解を含めて、他者の感情を共有すること」というものと考えており、多次元共感性尺度から自己指向的反応除く4つの下位概念に関する質問項目を採用することとした。そして、情動的側面の自己指向的な反応として野村ら（2015）の個人的苦痛に関する項目（「人がけがをすところを見ると、自分までドキッとしてしまう」「周りのみんなが緊張している状況は怖く感じる」など）の質問項目を加え、計27項目を共感性に関する質問項目として使用した。

手続き

研究協力者には最初に援助場面が提示され、このような場面に遭遇した場合、自分ならどうするかを「援助するだろうと非常に思う」から「援助しないだろうと非常に思う」まで、6件法で回答を求めた。その後、各場面ごとに9～11種類の情報が提示され、援助するかしないかの行動を選択する際、それ

ぞれの情報についてどの程度考慮するかについて「非常に考慮する」から「全く考慮しない」まで、6件法で回答を求めた。6つの援助場面すべてについて回答し終えたら、次に共感性に関する質問への回答を求めた。共感性に関する質問の27項目については、それぞれ、「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」の6件法で回答を求めた。

結 果

共感性

共感性に関する27の質問項目について、「全くあてはまらない」を1点～「非常にあてはまる」を6点と得点化し、主因子法で因子分析を行った。固有値1以上の因子が7つ抽出されたが、そのうち、共感性として解釈が可能なものは固有値が大きなものから4因子であった。プロマックス回転後のそれぞれの因子への因子負荷量が0.5以上の質問項目をもとに因子の解釈を行い、第1因子は視点取得因子、第2因子想像性因子、第3因子は被影響性因子、第4因子は他者指向的反応因子と命名した（表1）。

4つの各因子に因子負荷量0.5以上を示した質問項目について、研究協力者ごとに平均値を出し、それぞれの因子が示す共感性の下位尺度得点とした。視点取得得点は、「人と対立しても、相手の立場に立つ努力をする」など5項目について逆転項目を考慮して算出した平均点である。想像性得点は、「面白い物語や小説を読んだ際には、話の中の出来事がもしも自分に起きたらと想像する」など5項目について同様に逆転項目を考慮して算出した平均点である。被影響性得点は、「物事を、まわりの人の影響を受けずに自分一人で決めるのが苦手だ」など3項目について逆転項目を考慮して算出した平均点である。他者指向

表 1. 共感性 因子分析結果 (因子負荷量)

	視点取得	想像性	被影響性	他者指向 的反応	V	VI	VII
人と対立しても、相手の立場に立つ努力をする。	0.86	-0.01	0.11	-0.17	0.14	0.07	-0.18
常に人の立場に立って、相手を理解するようにしている。	0.80	-0.03	-0.18	0.16	0.13	0.06	-0.20
自分と違う考え方の人と話しているとき、その人がどうしてそのように考えているのかをわかろうとする。	0.74	-0.08	-0.10	0.10	-0.13	0.10	0.24
相手を批判するときは、相手の立場を考慮することができない。	-0.62	0.07	-0.16	0.04	0.09	-0.02	0.44
人の話を聞くときは、その人が何を言いたいのかを考えながら話を聞く。	0.55	0.25	0.09	-0.08	-0.07	-0.25	0.09
面白い物語や小説を読んだ際には、話の中の出来事がもしも自分に起きたらと想像する。	0.00	0.82	-0.13	0.00	0.08	-0.11	-0.08
自分に起こることについて、繰り返し、夢見たり想像したりする。	0.16	0.68	-0.02	-0.16	-0.02	0.00	0.19
空想することが好きだ。	-0.20	0.63	0.09	-0.12	-0.15	0.16	-0.08
小説の中の出来事が、自分のことのように感じることはない。	-0.08	-0.61	-0.06	-0.11	0.22	0.00	0.41
感動的な映画を見た後は、その気分についていつまでも浸ってしまう。	-0.03	0.55	-0.16	0.16	0.23	0.00	0.02
他人の感情に流されてしまうことはない。	-0.06	0.00	-0.79	0.06	0.05	-0.02	0.10
自分の信念や意見は、友人の意見によって左右されることはない。	-0.01	0.28	-0.76	-0.02	-0.03	-0.05	0.08
物事を、まわりの人の影響を受けずに自分一人で決めるのが苦手だ。	0.02	0.06	0.50	0.00	0.13	0.07	0.03
まわりの人がそうだといえば、自分もそうだと思う。	-0.10	0.12	0.46	0.08	0.17	0.18	0.01
自分の感情はまわりの人の影響を受けやすい。	-0.01	0.24	0.35	0.18	0.22	0.05	0.06
まわりに困っている人がいると、その人の問題が早く解決するといいなあとと思う。	-0.10	-0.03	-0.10	0.83	0.03	0.01	-0.04
悲しんでいる人を見ると、なぐさめてあげたくなる。	0.14	-0.14	0.07	0.70	-0.04	-0.02	0.20
他人が失敗しても同情することはない。	0.06	0.05	-0.05	-0.69	-0.01	0.20	0.09
人が頑張っているのを見たり聞いたりすると、自分には関係なくても応援したくなる。	-0.01	0.10	0.01	0.59	-0.08	0.16	0.00
緊急の状況をうまく処理するのは苦手だ。	0.04	-0.14	0.15	0.01	0.81	-0.09	-0.10

援助行動における情報処理過程

	視点取得	想像性	被影響性	他者指向的 反応	V	VI	VII
緊急の状況になると、自分のコントロールができなくなりがちだ。	0.08	0.02	-0.17	-0.07	0.73	0.23	0.12
緊急の状況になると、落ち着かなくなる。	-0.01	0.16	0.21	-0.09	0.61	-0.14	0.28
緊急の状況で助けを求めている人に会うと、どうしていいかわからなくなる。	0.05	-0.05	0.18	-0.14	-0.06	0.75	-0.02
周りの人が感情的になっていると、どうしていいかわからなくなることがある。	0.00	0.03	0.01	0.16	0.24	0.48	0.05
悩んでいる友達がいるけど、その悩みを分かち合うことができない。	-0.15	-0.08	-0.09	-0.36	0.07	0.47	0.09
周りのみんなが緊張している状況は怖く感じる。	0.10	0.21	-0.07	0.09	0.19	0.41	-0.15
人がケガをするところを見ると、自分までドキッとしてしまう。	-0.02	0.08	0.17	0.25	-0.19	0.29	0.11
固有値	5.19	4.15	1.68	1.42			
寄与率 (%)	19.23	15.36	6.20	5.25			
因子間相関							
	視点取得		0.10	-0.15	0.51		
	想像性			0.29	0.46		
	被影響性				0.26		

的反応得点は、「まわりに困っている人がいると、その人の問題が早く解決するといいなあとと思う」など4項目について逆転項目を考慮して算出した平均点である。

視点取得得点、想像性得点、被影響性得点、他者指向的反応得点をもとに、それぞれ、研究協力者をその得点の低群・中群・高群に分類した。人数が3等分になるよう分類し、境界に同じ数値の人がいた場合、低群と高群の特徴を明確にするため、それらの人はすべて中群にまとめた。それぞれの群の人数、得点の範囲をまとめたものを表2に示す。

援助行動質問

各場面での援助行動質問に対して、「援助しないだろうと非常に思う」を1点～「援助するだろうと非常に思う」を6点と得点化し、主因子法で因子分析を行ったところ、固有値

1以上の因子が2つ抽出され、プロマックス回転を行った結果、カメラシャッター場面のみ第2因子に負荷量が高かった。そこで、カメラシャッター場面を除いた5つの場面再度因子分析を行った。その結果、固有値1以上の因子が1つ抽出され、全ての場面が第1因子に高い負荷量を示していた。この5場面での援助行動質問の信頼性係数を求めたところ、高い値を示した ($\alpha=0.72$)。そこで、カメラシャッター場面を除く5場面の援助行動質問の得点の平均値を援助行動得点とした。

共感性と援助行動

4つの共感性下位尺度得点(視点取得得点、想像性得点、被影響性得点、他者指向的反応得点)の高さ(低・中・高)をそれぞれ独立変数とし、援助行動得点を従属変数とする1要因の分散分析を行った。その結果、視点取

表 2. 各共感性下位尺度得点の群別得点分布と人数

	全体		低群		中群		高群	
	平均	標準偏差	人数	範囲	人数	範囲	人数	範囲
視点取得得点	4.26	0.94	42	2.0-3.8	57	4.0-4.6	38	4.8-6.0
想像性得点	4.25	0.91	45	1.5-3.8	57	4.0-4.8	35	5.0-6.0
被影響性得点	3.70	0.92	37	1.0-3.0	63	3.33-4.0	37	4.33-6.0
他者志向的反応得点	4.32	0.82	34	2.0-3.75	69	4.0-4.75	34	5.0-6.0

得の主効果 ($F(2, 134)=7.65, p<.001$) が見られ、視点取得得点が高い群ほど援助行動得点が高くなっていった。他者指向的反応の主効果も見られ ($F(2, 134)= 6.96, p<.01$)、他者指向的反応得点が高い群ほど援助行動得点が高くなっていった。想像性の主効果、被影響性の主効果は見られなかった。以上の結果は、共感性の認知的側面および情動的側面の他者指向的な面が高いほど援助行動を行う傾向が高いということを示している (図 1)。

共感性と情報の考慮

それぞれの場面でそれぞれの情報をどの程度考慮するかに関する質問への回答を、「全く考慮しない」を 1 点～「非常に考慮する」を 6 点と得点化した。それぞれの情報について、カメラシャッター場面を除く 5 場面の平均得点をそれぞれの情報を考慮する程度を表す得点とした。ただし、「被援助者はどの程度困っているか」と「被援助者は助けを求め

ているか」については、携帯電話置き忘れ場面では質問していないので、携帯電話置き忘れ場面を除いた 4 場面の平均点を用いた。

それぞれの情報をどの程度考慮するかを表す得点について、各共感性下位尺度別に、共感性の高さ×情報の種類の 2 要因分散分析を行った。

視点取得と情報の考慮. 2 要因分散分析の結果、情報の種類の主効果が見られた ($F(10, 1340)=91.44, p<.001$)。多重比較の結果、「被援助者は困っているか (困っているか)」・「被援助者は自分で解決できそうか (自分で解決)」・「被援助者は助けを求めているか (援助要請)」・「自分は急いでいるか (急いでいるか)」の 4 項目が最も考慮されていた。続いて「周りに人がいるか (他者存在)」・「周りの人の対応 (他者対応)」・「援助する際の程度時間がかかりそうか (かかる時間)」・「援助しなかったら自分はどの程度罪悪感を

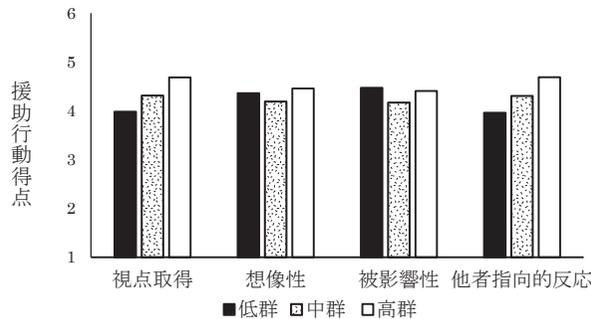


図 1. 共感性各下位尺度得点の高さによる援助行動得点の違い

感じそうか（罪悪感）」・「援助したら相手はどう感じるか（相手はどう感じるか）」がよく考慮されており、「被援助者の外見（外見）」・「援助したら自分はどの程度満足感を感じそうか（満足感）」が最も考慮の得点が低いことが分かった。視点取得の主効果、視点取得と情報の種類との交互作用は見られなかった。2要因分散分析では視点取得の主効果、視点取得と情報の考慮との交互作用が見られなかったが、視点取得の効果を見るため、11の情報を個別にして視点取得得点の高さによる1要因分散分析を行った。その結果、「困っているか」・「急いでいるか」に関してそれぞれ視点取得の主効果が見られる傾向があった（順に $F(2, 134)=2.93, p<.10$; $F(2, 134)=2.47, p<.10$ ）。「困っているか」は視点取得が高い群の方がよく考慮すること、「急いでいるか」は視点取得が低い群の方がよく考慮することが示された（図2）。

想像性と情報の考慮. 2要因分散分析の

結果、想像性の主効果と情報の種類の主効果がそれぞれ見られた（順に $F(2, 1340)=3.69, p<.05$; $F(10, 1340)=94.64, p<.001$ ）。想像性の主効果について多重比較をしたところ、低群よりも中群が有意に情報を考慮していた。また、想像性と情報の種類の交互作用が見られた（ $F(20, 1340)=2.37, p<.001$ ）。「相手はどう感じるか」、「罪悪感」に想像性の単純主効果が見られ、中群・高群が低群よりも考慮していた。また、「外見」、「他者存在」、「他者対応」、「満足感」にも想像性の単純主効果が見られ、いずれも中群の方が低群よりも考慮していた。さらに、「かかる時間」にも想像性の単純主効果が見られ、中群が高群よりも考慮していた（図3）。なお、単純主効果の検定は10%水準で行った。以下の被影響性および他者指向的反応と情報の考慮のところの単純主効果の検定も同様である。

被影響性と情報の考慮. 2要因分散分析の結果、情報の種類の主効果が見られた（ F

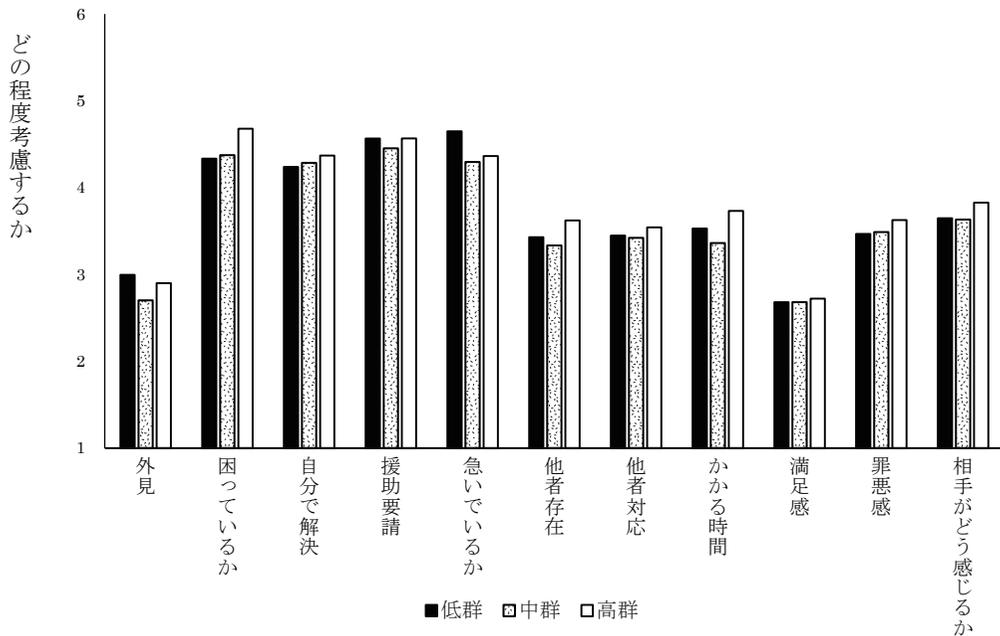


図2. 視点取得得点の高さによって各情報を考慮する程度は異なるか

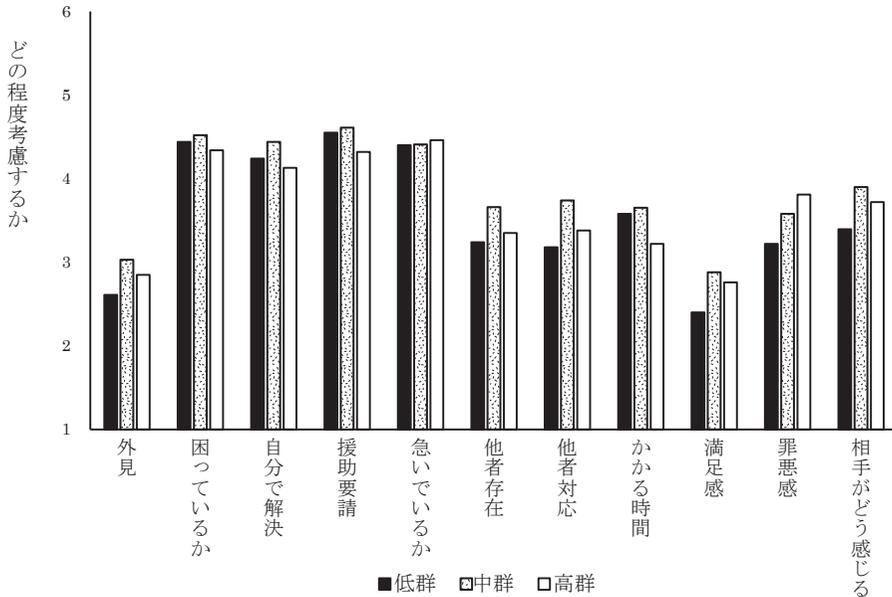


図3. 想像性得点の高さによって各情報を考慮する程度は異なるか

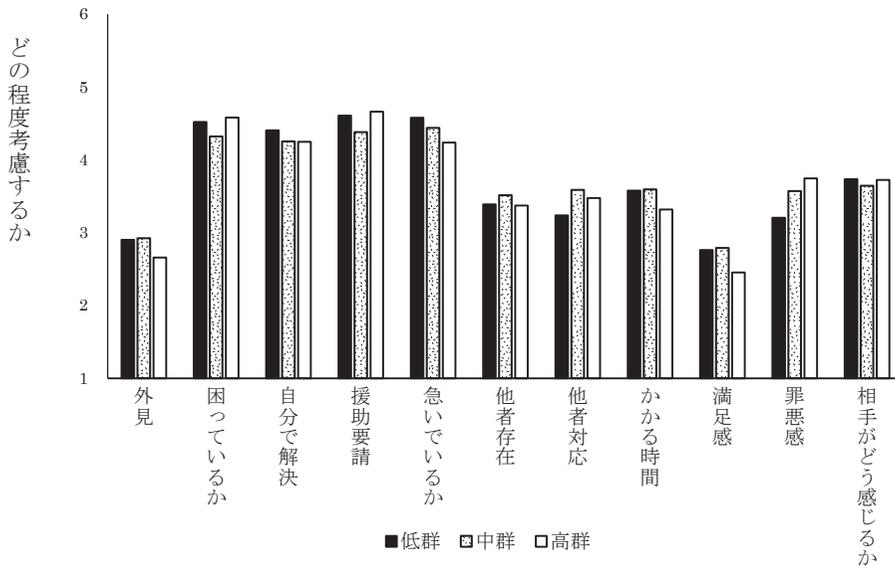


図4. 被影響性得点の高さによって各情報を考慮する程度は異なるか

(10, 1340) = 95.03, $p < .001$)。被影響性の主効果は見られなかった。また、被影響性と情報の種類の交互作用が見られた ($F(20, 1340) = 1.99, p < .01$)。「罪悪感」に被影響性の単純主効果が見られ、中群・高群は低群よりも考慮していた(図4)。

他者指向的反應と情報の考慮. 2要因分

散分析の結果、情報の種類の主効果が見られた ($F(10, 1340) = 87.86, p < .001$)。他者指向的反應の主効果は見られなかった。また、他者指向的反應と情報の種類の交互作用が見られた ($F(20, 1340) = 2.79, p < .001$)。「困っているか」、「罪悪感」に他者指向的反應の単純主効果が見られ、いずれも中群・高群は低群より

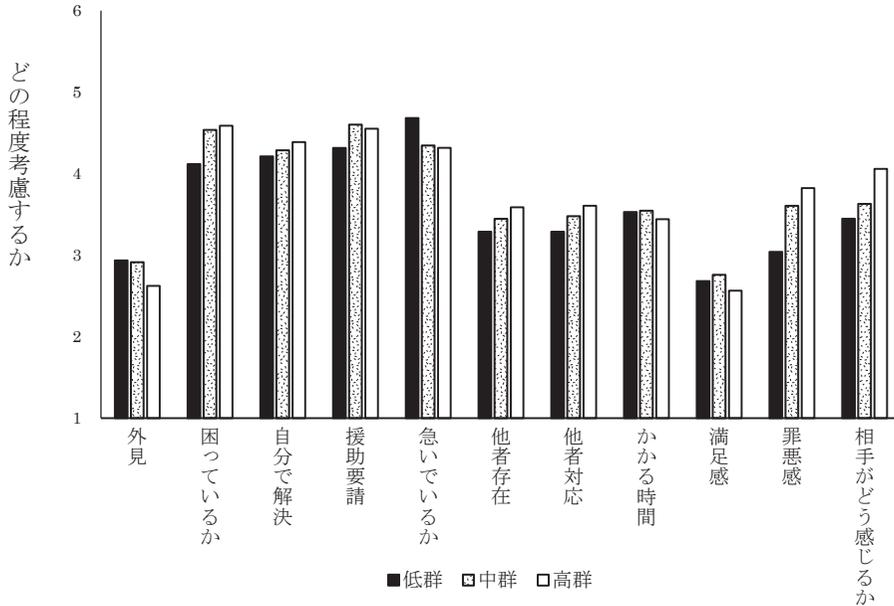


図5. 他者志向的反応得点の高さによって各情報を考慮する程度は異なるか

も考慮していた。また、「相手がどう感じるか」にも他者指向的反應の単純主効果が見られ、高群が中群・低群よりも考慮していた(図5)。

情報の考慮と援助行動

情報の考慮と援助行動の関係を明らかにするため、援助行動得点を従属変数、11の情報の考慮の程度の得点を独立変数とし、ステップワイズ法で重回帰分析をした。その結果、決定係数が0.37であり、0.1%水準で有意であった。「困っているか」、「罪悪感」、「かかる時間」が援助行動得点に対し有意な正の

標準偏回帰係数を示し、これらを考慮するほど援助する傾向があることが示された。また、「他者対応」、「急いでいるか」、「自分で解決」が援助行動得点に対し有意な負の標準偏回帰係数を示し、これらを考慮するほど援助しない傾向があることが示された(表3)。

考 察

下尾(2017)では、共感性の中でも視点取得と他者指向的反應が高いほど援助行動を遂行する傾向が高くなっており、想像性や被影

表3. 情報の考慮と援助行動との関連性についての重回帰分析

	β
被援助者は困っているか	0.50***
罪悪感	0.31***
他者対応	-0.23***
自分は急いでいるか	-0.27***
かかる時間	0.19*
被援助者は自分で解決できそうか	-0.19*

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

響性については援助行動遂行との関連性は見られなかった。共感性の中でも認知的および情動的な面の双方において他者指向的な側面が援助行動の遂行と関連性を持ち、自己指向的な側面は援助行動の遂行に関連性を示していないと言える。

視点取得の高い群であるほど「被援助者が困っているか」を考慮し、「自分が急いでいるか」を考慮しない傾向が見られた。また他者指向的な反応の高い群であるほど「被援助者が困っているか」、「自分が罪悪感を感じるか」、「被援助者がどう感じるか」を考慮する傾向が見られた。これらの結果は、認知的・情動的の双方において、他者指向的な側面の共感性が高いほど、援助場面において相手が困っているかどうかという相手の状態を考慮することを示している。さらに情動的側面の他者指向的な共感性が高いほど援助をするかしないかによって自分が罪悪感を感じたり相手がどのように感じるかという内面性に着目し、それを考慮する傾向が高いことを示している。

一方、援助行動との直接的な関連性は見られなかったが、認知的側面の自己指向的な共感性と考えられた想像性と、考慮する情報との関連性についても興味深い結果が得られている。まず、想像性の低い群では全体として情報を考慮しない傾向があった。また、「被援助者がどう感じるか」や「自分が罪悪感を感じるか」といった内面に関する情報については、中群も高群もともによく考慮していたが、「被援助者の外見」・「他者の存在」・「他者の対応」・「援助にかかる時間」などの外在的な情報については中群がもっともよく考慮しており、高群では多少考慮する傾向が減少していた。これらのことから、想像性が低いと全体的に援助場面において様々な情報を考慮しないが、想像性が中程度になると外在的な情報も

内面的な情報もともに考慮するようになり、さらに想像性が高くなると内面的な情報に特化して考慮する傾向が高くなり、外在的な情報については相対的に考慮する傾向が弱まると考えられる。

重回帰分析の結果、「被援助者は困っているか」、「自分は罪悪感を感じるか」、「援助にかかる時間」を考慮するほど援助する傾向が高まり、「他者の対応」、「自分は急いでいるか」、「被援助者は自分で解決できそうか」を考慮するほど援助する傾向は低くなるのが明らかになった。被援助者が困っているかどうかは援助の必要性を考える方向での考慮であり、被援助者は自分で解決できそうかは援助の必要性がないと考える方向での考慮であり、こういった情報を考慮すること自体が、すでに援助行動をする傾向およびしない傾向にそれぞれつながっていると考えられる。

また、「援助にかかる時間」と「自分は急いでいるか」は、実際に援助が可能かどうかを見積もる際に必要な情報であると考えられるが、それぞれ援助の遂行に対しては、前者が正の、後者が負の関係を示した。このことから、援助にかかる時間という客観的な情報の検討は援助をする方向での考慮であるのに対し、自分がどれくらい急いでいるかという自分の都合に関する検討は援助をしない方向での考慮になっていると言える。ただし、これらはワーディングによっても変わる可能性があり、今後さらに検討する必要があることではある。

援助場面における他者の存在が援助行動を抑制することを導くことは、傍観者効果として広く知られている(Latané & Darley, 1968)。下尾(2017)の場合は、他者が傍観しているのか援助しようとしているのかについては明示されておらず、自分以外の他者が

援助場面でどのように対応しているかについての考慮を尋ねたものであるが、他者の対応を考慮することはむしろ援助行動を抑制する方向に働いくことを示しており、傍観者効果に関する知見と一致した結果を示している。

以上のことをまとめると、共感性の中で視点取得や他者指向的の反応という認知的・情動的に他者を指向する側面が、被援助者が困っているかどうかの考慮を促進し、それが援助行動の遂行につながっていると言える。これは、他者がある困難さに直面していることに共感的に認知・反応することが援助行動につながるという援助行動生起の1つのルートを示していると考えられる。また、情動的他者指向的な共感性は、援助しなかったときの自分の罪悪感を考慮することを促進し、これが援助行動の遂行につながっているということも明らかとなった。このことは、援助行動を起こさないときの罪悪感というものを通して援助行動が遂行されるというルートがもう1つ考えられることを示している。援助行動の生起にかかわるその他の要因として、自分以外の他者の対応や自分の都合を考慮することが援助行動を抑制すること、援助を実行するためのコストを客観的に考慮することはむしろ援助行動を促進することも示唆された。

川上の研究

川上(2017)は、親の養育態度の認知が、援助行動とどのように関係しているのか、また援助行動を行う際の情報処理ステップにおける結果の予期の仕方とどのように関連しているのかを検討している。

親の養育態度の認知については、これまで、受容的であるかどうか、統制的であるかどうか取り上げられてきており、子どもの攻撃

性(中道・中澤, 2003)や自己制御機能(森下・前田, 2015)など様々なパーソナリティ特性との関連性が検討されている。援助行動との関係についても、親の養育態度が受容的であることと幼児における援助行動との間に正の関連性が見られること(島田・桂田, 2015)、大学生が認知する現在の親子関係において情緒的支持を受けていると感じているほど援助行動を行う傾向にある(井出・菅, 2015)ことが明らかにされている。

これらの研究は、ある時点での親の養育態度または親の養育態度についての子ども側の認知が、その時点での子どものパーソナリティ特性や援助行動と関連しているかどうかを検討したものである。これに対して、川上(2017)は、小学生の頃の親の養育態度について大学生が現在抱えている認知が、大学生の現在の援助行動と関連性を持つのかどうかを検討した。このように、子ども時代に親との間で形成されたものが、後に他の人々との対人関係の持ち方に影響を与えるという考え方は、内的作業モデルの考え方に見てとることができる。内的作業モデルは、子どもが愛着対象との具体的な経験を通して作り上げられる表象であり、愛着対象が支持的で応答的であるか、そして自分は価値ある存在、助けられるに値する存在であるかどうかに関する表象である。この内的作業モデルは、後の児童期や青年期における他の人々との関係においても対人的行動を方向付ける重要な機能を持つと考えられている(遠藤, 1993)。援助行動は他者一般に対して、その人を受容して遂行する行動であると考えられるので、親との間で形成された内的作業モデルが受容的なものであれば、他者に対しても援助行動が出現しやすくなると考えられる。

川上(2017)は、さらに、親の養育態度の

認知と援助場面における情報処理過程の関係についても検討するために、Dodge の社会的情報処理モデルに基づいて、援助場面においてとる行動のもたらす結果の予期の仕方が、親の養育態度の認知と関係するのか、援助行動の遂行と関係するのかということを検討した。

Dodge の社会的情報処理モデルは、攻撃行動の遂行を情報処理過程から説明するために立てられたモデルである。このモデルでは、情報処理のステップとして、符号化、解釈、反応の探索、反応の決定、反応の遂行というステップが考えられている。符号化とは、状況の中のどういった手掛かりに注意を向け、情報処理するものとして取り入れるかということであり、解釈とは取り入れられた情報を長期記憶や他の情報とともにどのように意味づけるかというものである。反応の探索とは、反応レパートリーの中から可能な反応を探索することである。そして、反応の決定とは想起された反応の評価を行うステップであり、とりうる行動のもたらす結果を予期することが含まれる (Dodge & Crick, 1990; 中澤, 1996)。

川上 (2017) は、Dodge の社会的情報処理モデルを援助行動に応用し、反応の決定のステップに含まれる結果の予期を取り上げた。具体的には、援助場面で援助を行った場合、自分は満足感を持つと思うか、相手は喜ぶと思うか、援助を行わなかった場合、自分は罪悪感を持つと思うか、相手は困ると思うかという質問で結果の予期の仕方を調べることとした。そして、これらの結果の予期の仕方と、親の養育態度の認知との関係、援助行動の遂行との関係を検討した。

方 法

研究協力者

研究協力者は島根大学生 80 名(男性 39 名、女性 41 名、1 年生 18 名、2 年生 19 名、3 年生 28 名、4 年生 15 名)であった。

材料

援助行動. 菊池 (1988) の向社会的行動尺度 (大学生版) 20 項目をもとに質問項目を作成した。菊池 (1988) は「知らない人が落として散らばった荷物を、いっしょに集めてあげる」、「列に並んでいて、急ぐ人のために順番をゆずる」など日常場面で経験しうる援助行動の頻度に関する質問によって尺度を構成している。川上 (2017) では、菊池の質問項目の内、「気持ちの落ち込んだ友人に電話したり、手紙を出す」を「気持ちの落ち込んだ友人に電話したり、メールをする」に、「自動販売機や切符売機などの使い方を教えてあげる」を「ものの使い方 (自動販売機や新しい道具など) がわからない人に使い方を教えてあげる」に変更するなどの微修正を施して 20 項目を作成した。研究協力者には、それぞれの行動について、「全くしたことがない」～「よくしたことがある」の 5 件法で回答を求めた。各項目に記述された場面に遭遇したことがない場合には、「遭遇したことがない」という欄にチェックするよう求めた。

小学生の頃の親の養育態度の認知. 大学生の現在からみた、小学生の頃の親の養育態度の認知を質問する項目を作成した。姜・酒井 (2006) が作成した子どもの認知する親の養育態度尺度をもとに、大学生から見た小学生の頃の親の養育態度の認知を問う文末形式に修正して質問項目を作成した。質問項目は、「親は聞いたことに対してきちんと答えてくれた」・「親から学校に遅刻しないように言われた」など、姜・酒井 (2006) で「受容」の

因子、「統制」の因子に因子負荷量の高かった20項目を用いた。回答は、「全くあてはまらない」～「非常にあてはまる」の6件法で求めた。

結果の予期. 下尾(2017)で用いられた日常的な援助場面5場面(引越し荷物運びの人手、携帯電話置き忘れ、切符の買い方、両替、書類落下)に遭遇した時、援助をした場合にどのような結果が生ずると思うか、援助をしなかったときにどのような結果が生ずると思うかを質問した。援助をした場合の結果の予期については、「自分は満足すると思うか」、「被援助者は喜ぶと思うか」について尋ねた。援助をしなかった場合の結果の予期については、「自分は罪悪感を持つと思うか」、「被援助者は困ると思うか」について尋ねた。回答は、「全く～ないと思う(例:全く満足しないと思う)」から「非常に～と思う(例:非常に満足すると思う)」の6件法で求めた。

手続き

質問紙を配布して調査を行った。質問の順番は、まず、菊池(1988)の向社会的行動尺度をもとに作られた援助行動の質問を行い、次に、小学生の頃の親の養育態度の認知についての質問を行い、最後に結果の予期についての質問を行った。なお、結果の予期の質問については、各援助場面についての記述の後、まず、その場面に遭遇したとき援助をすると思うかを、「援助するだろうと非常に思う」～「援助しないだろうと非常に思う」の6件法で尋ね、その後、結果の予期に関する4つの質問への回答を求めた。

結 果

援助行動

援助行動に関する質問各項目について、「全くしたことがない」を1点～「よくしたこと

がある」を5点と得点化した。また、そのような場面に「遭遇したことがない」は、その行動をしたことがないことになるので、1点と得点化した。

20項目の回答について主因子法で因子分析をした結果、第1因子の固有値が5.88と高く、第2因子の固有値1.77と大きな開きがあった。また、第1因子の寄与率が29.41%であり、第2因子の寄与率8.82%と大きな開きがあった。したがって、1因子で考えることがふさわしいと判断し、因子数を1に固定して再度因子分析を行った結果、因子負荷量が0.4以下の項目は「あまり親しくない友人にもノートを貸す」・「家族の誕生日や父の日・母の日などに、家に電話したりプレゼントしたりする」・「友人のレポート作成や宿題を手伝う」の3項目であった。また、20項目の信頼性係数 α は0.87であった。各項目を削除した場合の信頼性係数 α の値を見ると、上記の3項目についてのみ、その項目を削除すると α の値が上昇した。これらのことから、上記の3項目を除いて、17項目の平均点を援助行動得点とした。

小学生の頃の親の養育態度の認知

小学生の頃の親の養育態度の認知に関する各項目への回答を、「全くあてはまらない」を1点～「非常にあてはまる」を6点と得点化した。

20項目への回答について主因子法で因子分析した結果、固有値1以上の因子は4因子抽出されたが、第2因子までが寄与率が10%以上であったので、因子数を2に固定し、再度主因子法で因子分析を行った。プロマックス回転後の因子負荷量を表4に示す。第1因子は「親と一緒に喜んだり、悲しんだりしてくれた」、「ちゃんとできた時やがんばった時に親はほめてくれた」など受容的な養育態

度の項目の因子負荷量が高かったため、受容因子と命名した。第2因子は「親から約束を守るように教えられた」、「親から早寝早起きするように言われた」など統制的な養育態度の項目の因子負荷量が高かったため、統制因子と命名した。

それぞれの因子について、因子負荷量が0.4以上の項目について、信頼性分析を行った結果、受容因子に因子負荷量0.4以上を示した11項目の α 係数は0.91であり、信頼性が高いとみなすことができ、この11項目の平均点を受容得点とした。また、統制因子に因子負荷量0.4以上を示した6項目の α 係数は0.77であり、信頼性は高いとみなすことができ、

この6項目の平均点を統制得点とした。

結果の予期

各場面におけるそれぞれの結果の予期について、「全く～ないと思う（例：全く満足しないと思う）」を1点～「非常に～と思う（例：非常に満足すると思う）」を6点と得点化した。

各結果の予期に関する質問について、5場面の質問項目の信頼性係数を求めた。「援助したとき自分は満足するか」（ $\alpha = 0.81$ ）、「援助したとき相手は喜ぶか」（ $\alpha = 0.75$ ）、「援助しなかったとき自分は罪悪感を持つか」（ $\alpha = 0.76$ ）、「援助しなかったとき相手は困るか」（ $\alpha = 0.71$ ）のそれぞれの質問について、信

表 4. 小学生の頃の親の養育態度についての認知 因子分析結果（因子負荷量）

	受容	統制
親と一緒に喜んだり、悲しんだりしてくれた	0.94	-0.14
ちゃんとできた時やがんばった時に親はほめてくれた	0.80	-0.19
親は聞いたことに対してきちんと答えてくれた	0.78	0.11
失敗したとき、親は「次がんばろう」と励ましてくれた	0.76	-0.05
親は悩み事を真剣に聞いてくれた	0.73	0.11
親はあなたのことに一生懸命になってくれた	0.72	0.01
親はあなたに合わせて会話してくれた	0.71	-0.06
必要な時は親はできる限り一緒にいてくれた	0.69	-0.11
親は毎日興味や関心を持って今日のあなたの出来事を聞いてくれた	0.69	0.05
悲しんでいる時、親はあなたをだきしめてくれた	0.56	0.07
親は色々な所につれて行ってくれた	0.52	-0.04
友達を家に連れて行くと親は喜んで迎えてくれた	0.36	0.11
親から自分のことは自分で考えてやるように言われた	0.31	0.15
悪いことをしたら親から怒られた	0.28	0.19
親から約束を守るように教えられた	0.23	0.67
親から早寝早起きするように言われた	-0.17	0.67
親から学校に遅刻しないように言われた	-0.15	0.65
親から食べ物の好き嫌いをしないように言われた	-0.08	0.64
親から嘘をつかないように教えられた	0.16	0.51
親からありがとうやごめんなさいを言うように言われた	0.40	0.41
固有値	6.72	2.00
寄与率（%）	33.61	10.01
因子間相関		0.30

表5. 小学生の頃の親の養育態度についての認知と結果の予期の間の相関係数

	受容	統制
援助をして自分は満足すると予期	0.32**	-0.10
援助をして相手は喜ぶと予期	0.26*	-0.01
援助をしないと自分は罪悪感を持つと予期	0.39***	-0.05
援助をしないと相手は困ると予期	0.27*	0.08

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

頼性は高いと言えた。したがって、それぞれ5場面の平均値を、援助して自分満足と予期待点、援助して相手喜ぶと予期待点、援助せず自分罪悪感と予期待点、援助せず相手困ると予期待点とした。

結果の予期を測定する5つの場面では、まずその場面で援助すると思うかどうかをも質問している。この質問も援助行動を行う傾向を測定していると考えられるので、各場面での「援助すると思うかどうか」に関する質問の回答を「援助しないだろうと非常に思う」を1点～「援助するだろうと非常に思う」を6点と得点化し、5場面の平均点を結果の予期場面援助行動得点とした。

小学生の頃の親の養育態度の認知と援助行動の関連性

援助行動得点と、受容得点および統制得点とのピアソンの相関係数を求めたところ、援助行動得点と受容得点に有意な正の相関が見られた ($r=.29, p<.01$)。援助行動得点と統制得点との間には有意な相関は見られなかった ($r=.13, n.s.$)。結果の予期場面援助行動得点についても、受容得点および統制得点とのピアソンの相関係数を求めたところ、結果の予期場面援助行動得点と受容得点に有意な正の相関が見られた ($r=.28, p<.05$)。結果の予期場面援助行動得点と統制得点との間には有意な相関は見られなかった ($r=.00, n.s.$)。

小学生の頃の親の養育態度の認知と結果の予期

結果の予期についての4つの尺度得点（援助して自分満足と予期待点、援助して相手喜ぶと予期待点、援助せず自分罪悪感と予期待点、援助せず相手困ると予期待点）と、受容得点および統制得点とのピアソンの相関係数を求めた。その結果、受容得点と結果の予期各尺度得点との間にそれぞれ有意な正の相関が見られた。統制得点と結果の予期各尺度得点の間には有意な相関は見られなかった（表5）。

援助行動と、小学生の頃の親の養育態度の認知および結果の予期との関係

援助行動が小学生の頃の親の養育態度についての認知および結果の予期によってどのように説明されるのかを検討するため、重回帰分析を繰り返し、パス解析を行った。まず、結果の予期各尺度得点を従属変数、受容得点、統制得点をそれぞれ独立変数とし、強制投入法で重回帰分析を行った。援助して自分満足と予期待点へは受容得点から有意な正の標準偏回帰係数が ($\beta=.39, p<.001$)、統制得点から有意な負の標準偏回帰係数が ($\beta=-.22, p<.05$) 見られた ($R^2=.15, p<.01$)。援助して相手喜ぶと予期待点へは受容得点から有意な正の標準偏回帰係数が ($\beta=.29, p<.05$) 見られた ($R^2=.08, p<.05$)。援助せず自分罪悪感と予期待点へは受容得点から有意な正の

標準偏回帰係数が ($\beta=.44, p<.001$) 見られた ($R^2=.18, p<.001$)。援助せず相手困ると予期待点へは受容得点から有意な正の標準偏回帰係数が ($\beta=.27, p<.05$) 見られた ($R^2=.07, p<.10$)。

次に、援助行動得点を従属変数、受容得点、統制得点、結果の予期各尺度得点を独立変数としてステップワイズ法で重回帰分析を行った。その結果、援助行動得点へ援助して相手喜ぶと予期待点から有意な正の標準偏回帰係数が ($\beta=.44, p<.001$) 見られた ($R^2=.19, p<.001$)。パス図を図6に示す。

また、結果の予期場面援助行動得点を従属変数、受容得点、統制得点、結果の予期尺度各得点を独立変数としてステップワイズ法で重回帰分析を行った。その結果、結果の予期場面援助行動得点へ援助して相手喜ぶと予期待点と援助せず自分罪悪感と予期待点から有意な正の標準偏回帰係数が ($\beta=.48, p<.001$; $\beta=.24, p<.05$) 見られた ($R^2=.39, p<.001$)。パス図を図7に示す。

考 察

小学生の頃の親の養育態度について親が受容的であると認知しているほど、大学生は援助行動をとる傾向が見られた。一方、親が統制的であると認知していることは、援助行動をとる傾向と関連性を示さなかった。これらの結果は、大学生が認知する現在の親子関係のあり方と援助行動との関連性を調べた研究と同様のものである(井出・菅, 2015)。また、この結果は、内的作業モデルの考え方から予測されるものとも一致している。子ども時代に親から受容的に養育されたと認知しているほど、大学生になって一般的な他者へ援助する傾向が高いと言える。

親の養育態度の認知と結果の予期との相関を見ると、受容得点と結果の予期各得点に有意な正の相関があり、統制得点と結果の予期各得点は無相関であった。つまり、援助場面においては、援助の遂行だけでなく、社会的情報処理モデルの反応の決定ステップにおける結果の予期についても、親が受容的な養育

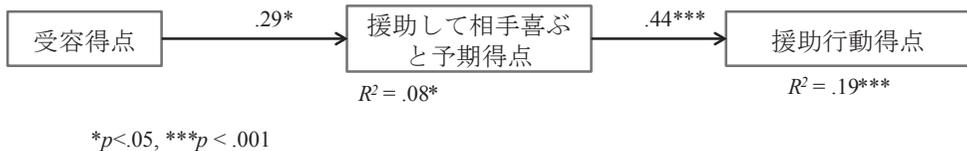


図6. 援助行動と、小学生の頃の親の養育態度の認知および結果の予期との関係

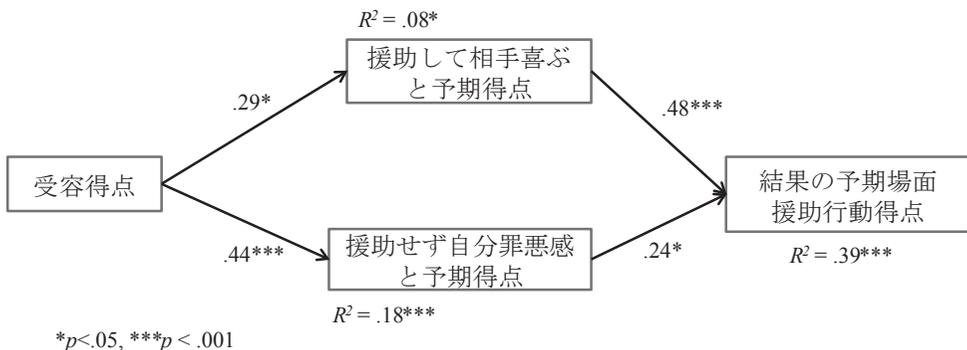


図7. 結果の予期場面援助行動と、小学生の頃の親の養育態度の認知および結果の予期との関係

態度であったかどうか、親が統制的な養育態度であったかどうかは特に関連性を示さないと言える。

結果の予期の各尺度得点で援助得点を説明してみると、一般的な援助行動を行う傾向を示すと考えられる援助行動得点に対しては、援助をして相手が喜ぶと予期する程度が有意に正の関連性を示していた。一方、結果の予期と同じ場面で援助するかどうかを測定した結果の予期場面援助得点に対しては、援助して相手が喜ぶと予期する程度とともに、援助をしなくて自分が罪悪感を持つと予期する程度が正の関連性を示していた。これらの結果は、援助をして相手が喜ぶことを予期するという共感的予期が援助行動を促進することが頑健にみられること、そして、援助場面において援助を行わないことで罪悪感を持つであろうと予期することも援助行動を促進するもう一つのルートとして存在すると考えることができる。このように、他者がある困難さに直面していることを改善して相手を快の状態にすることを志向する共感的に認知・反応するというルートと、援助をしないときの罪悪感というルートの2つが援助行動を促進しているという結果は、下尾（2017）の結果とも一致している。

川上（2017）は、社会的情報処理モデルが、援助行動についても適用可能であることを示している。攻撃的な行動の生起について立てられた Dodge の社会的情報処理モデルでは、攻撃的な行動をすることでうまくいくと結果を予期するかどうかと、攻撃的行動をする傾向との間に関連性を見出していた。本研究の援助行動についての結果の予期では、援助行動をすることで相手が喜ぶと予期することとともに、援助行動をしないことで自分が罪悪感を持つと予期することも援助行動の遂行に

説明力を持つことが示された。我々の意思決定過程において、ある行動をすることによる結果の予期だけでなく、ある行動を行わないときの結果の予期も重要な役割を果たしていることを見出したことは重要であり、今後、援助行動だけでなく他の行動の生起プロセスの検討にも応用していけると考えられる。

総合考察

下尾（2017）では、援助場面において他者が困っているかどうかの考慮が援助行動を促進していることを明らかにした。川上（2017）では、援助場面において援助を行うことで他者が喜ぶであろうと予期することが援助行動を促進していた。これらの結果は、他者がある困難さに直面していることに注意を向け、その困難さを減じて他者を快の状態に変容させるという共感的反応が援助行動につながるということを示している。

また、下尾（2017）では、援助しなければ自分は罪悪感を感じようかの考慮が援助行動の遂行を促進していた。川上（2017）もまた、援助場面において援助を行わないことによって自分が罪悪感を感じるという予期が援助行動の遂行を促進していた。他者が困難な状態に陥っているときに、それを改善する方向へ行為を行うべきであるという社会的ルールあるいは道徳観を持っていれば、援助行動を行わないことはそれへの違反となり、罪悪感が生じるだろう。そして、そのような罪悪感も援助行動の遂行へと導いていると考えることができる（久崎, 2006）。本論文で紹介した2つの研究は、情報の考慮と結果の予期という観点から、援助行動を遂行しないことに対する負の感情によっても援助行動の遂行がなされる側面もあることを明らかにしたとい

える。

川上 (2017) では、援助をすることへの他者への共感的予期や援助をしないことへの罪悪感の予期には、子どもの頃の親の養育態度が受容的であることが正の関連性を持つことを示しており、上記の2つのルートでの援助行動遂行傾向が、親の受容的養育態度の影響を受けて形成されていくことを示唆している。ただし、川上 (2017) は、あくまで大学生が現在の時点で認知した小学生の頃の親の養育態度であるので、実際に子どもの頃の親の養育態度がこのようなルートでの援助行動遂行と関係があるのかどうかについては、縦断的な研究による検討が必要である。

一方、下尾 (2017) では、その場にいる他者がどのような対応をしているか、および、自分がどれくらい急いでいるかという自分の状況を考慮することは援助行動を抑制する働きをしており、逆に、援助にかかる時間という援助の遂行に関する客観的な情報の考慮は援助行動を促進する働きをすることを明らかにしている。現実の援助場面では、これらの情報をも考慮しながら人は援助行動を遂行するかしないかを決定していくのだと考えられる。

本論文で紹介した2つの研究は質問紙による研究であり、援助場面における時間的経過を追った援助行動の出現機制を明らかにすることはむづかしい。現実の援助場面では、情報処理をしながら明らかになったことに基づいてさらなる情報処理がなされる。このようなダイナミックな意思決定過程を明らかにするためには、経時的な人の情報処理過程を明らかにする実験的検討が必要である。また、質問紙による調査は、人の意識上のことを抽出している。両研究の結果は他者に対する共感的反応と罪悪感という利他的動機が援助行

動の出現に働くことを示していた。しかし、これはあくまで意識上のことである。意識上ではないところでは、もっと利己的な動機に基づいて援助行動が出現する可能性もある。今後、視線分析などの方法を用いて、さらに総合的に情報処理過程の分析を行い、援助行動の出現機制を明らかにする必要がある。

引用文献

- Dodge, K. A. & Crick, N. R. (1990). Social information-processing bases of aggressive behavior in children. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 16, 8-22.
- Eisenberg, N. & Mussen, H. (1989). *The Roots of Prosocial Behavior in Children*. Cambridge, England: Cambridge University Press. (アイゼンバーグ, N.・マッセン, P. 菊池章夫・二宮克美 (共訳) (1991). *思いやり行動の発達心理*. 金子書房).
- 遠藤利彦 (1993). 内的作業モデルと愛着の世代間伝達. *東京大学教育学部紀要*, 32, 203-220.
- 久崎孝浩 (2006). 向社会的行为に対する恥・罪悪感の機能. *紀要 VISIO (九州ルーテル学院大学)*, 35, 1-15.
- 井出祐太・菅千索 (2015). 家族関係が子どもの向社会的行为に及ぼす影響について. *和歌山大学教育学部紀要教育科学*, 65, 71-76.
- 姜信善・酒井えりか (2006). 子どもの認知する親の養育態度と学校適応との関連について. *富山大学人間発達科学部紀要*, 1, 111-119.
- 川上千尋 (2017). 大学生における子どもの頃の親の養育態度の認知と向社会的行为との関連. *島根大学法文学部 2016 年度卒*

- 業論文。
- 菊池章夫 (1988). *思いやりを科学する：向社会的行動の心理とスキル*. 川島書店
- Latané, B. & Darley, J. M. (1968). Group inhibition of bystander intervention in emergencies. *Journal of Personality and Social Psychology*, 10, 215-221.
- 松井豊 (1990). 援助行動の意思決定における情報探索過程の分析. *実験社会心理学研究*, 30, 91-100.
- 森下正康・前田百合香 (2015). 児童期の母親の養育態度としつけ方略が自己制御機能の発達に与える影響. *京都女子大学発達教育学部紀要*, 11, 99-108.
- 中道圭人・中澤潤 (2003). 父親・母親の養育態度と幼児の攻撃行動との関連. *千葉大学教育学部研究紀要*, 51, 173-179.
- 中村陽吉 (1987). 援助行動とは. 中村陽吉・高木修 (共編著). *「他者を助ける行動」の心理学*. 光生館.
- 中澤潤 (1996). *社会的行動における認知的制御の発達*. 多賀出版.
- 野村弘平・赤井誠生・森川和則 (2015). 日本語版 IRI (対人反応性指標) 作成の試み. *日本心理学会第79回大会発表論文集*, 名古屋大学.
- 澤田瑞也 (1998). *カウンセリングと共感*. 世界思想社.
- 島田知華・桂田恵美子 (2015). 幼児の向社会的行動：母親自身の向社会的行動や養育態度との関連. *関西学院大学心理学研究*, 41, 45-49.
- 下尾彩加 (2017). 向社会的行動の意思決定場面における情報の考慮と共感性との関係. 島根大学法文学部 2016 年度卒業論文.
- 鈴木有美・木野和代 (2008). 多次元共感性尺度 (MES) の作成：自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて. *教育心理学研究*, 56, 487-497.